

日本サッカーにおける育成の現状と今後の展望

The current state and the future's view of player's development in Japanese soccer

1K08B506-1

星山源登

指導教員 主査 武藤泰明先生 副査 平田竹男先生

【目的】

本研究の目的は日本サッカーにおける育成の現状を明らかにし、よりよい育成の在り方を示すことである。年々日本サッカーの競技力は向上している。それは FIFA ワールドカップにおける日本代表の成績を見れば明らかである。しかし日本サッカー協会（JFA）が掲げる「JFA2005 年宣言」のなかで明記されている「2050 年までに FIFA ワールドカップで優勝する」という目標を達成するためには育成年代の改革が必要不可欠である。学校運動部、J クラブユース、地域クラブ、J リーグアカデミーなど育成年代の選手がプレーをする場は多くあるが、それぞれが同じビジョンを描き同じ方向に歩みを進めることが重要である。その舵取り役が JFA である。そのため JFA が育成の取り組みとしてどのようなことを行っているのかを明らかにし、諸外国の取り組みと比較することで日本にとって最適な育成の在り方を示したい。

【方法】

研究方法は大きく分けて 3 つある。一つ目は JFA のホームページ、レポート、テクニカルニュースから現在の育成の取り組みを明らかにする。JFA の取り組みとしては、トレセン制度、特別指定選手制度、ユースダイレクター制度、キッズプロジェクト、リーグ戦の導入、8 人制サッカーの導入、国体を U-16 に設定するなどが挙げられた。これらは JFA が主導となり育成年代の全ての選手が享受できる仕組みとなっている。二つ目は日の丸を背負い日本代表として闘う選手の出身チーム（ユース世代の代表は現在の所属チーム）を明らかにした。日本のサッカー人口における学校運動部出身の選手数は圧倒的に多いが各年代の代表となる選手の出身チームとなると変化が見られた。それはユース世代の代表ではクラブユースに所属の選手が多く、A 代表では学校運動部に所属する選手の割合が多いということである。高円宮杯全日本ユース大会での上位チームに J ク

ラブユースが多いことからその年代のエリートが集まる J クラブユースの競技力の高さがうかがえた。

三つ目は諸外国の育成の取り組みを明らかにし、日本の取り組みと比較した。筆者が特に注目したのは J リーグのトップチームに入団またはユースから昇格した選手の公式戦の場が日本にはないという点である。J サテライトリーグが 2009 年に廃止されたことによりプロになったが試合に出られない選手が試合をし経験を積める機会がなくなった。地域別育成リーグに参加している J クラブもあるが全ての J クラブが参加しているわけではなく、プロになったが試合をする環境がない選手が多くいる。イングランドではリザーブリーグが存在し、スペインでは各クラブのセカンドチームを 3 部リーグ等に出場させている。メキシコでは若手選手の出場機会を確保する為に 21 歳以下の選手をリーグ戦で 7645 分以上プレーさせなければならないと規定を設けている。このように諸外国と比較することで日本に足りないことが浮き彫りとなった。

【結果】

本研究を通して何度も目にすることになったのが「一貫指導」という言葉である。これは何も中高一貫校や同じ J クラブユース、地域クラブで長年プレーするというのではなく、指導者たちが同じビジョンを描きどのチームに所属しても同質の指導が受けられる環境を整えようという考えである。そのため各都道府県にユースダイレクターをおくなどする試みが行われ JFA が主導となり取り組んでいることがわかる。しかし、日本ではユース世代の選手の多くが学校運動部に所属していたという背景から中、高で 3 年単位のぶつ切りの育成を余儀なくされていたことが分かった。これらの難点を解消するためにもトレセン制度を利用し、中学や高校のサッカー部引退後にトレセンでチームを作り大会に出場することや中、高の指導者が連携をとりぶつ切り育成をなくすことが求められる。